目をこらして（14）

女の子たちが八人で、遊戯室で遊んでいた。様子を見に行くと、舞台のところに六人が腰掛けていて、あとの二人が遊戯室を走り回っている。そして、そのメンバーが時々入れ替わる。しばらくそのようにして遊んでいる

何を楽しんでいるのかが分からず、そばで見ていることにした。舞台のところに腰をかけている子たちは、つまらなそうな顔をしているように見えた。

「あなたたちが、走るところも見たいなあ」と話しかけてみても、しらーっという感じで反応がない。なんだ、なんだ、この感じは！、と私一人悶々としながら、繰り返される遊びの様子を見ていた。

するとしばらくして、走っていた子たちが、パッと並んで立ち、「これで中学校の運動会は終わりです」と言った。

えーっ、ということは？　と思いながら、ずっと座っていた子たちの方を見ると（そうよ、ようやくわかったの！）とでも言いたそうな顔でうなずいた。

「私たち、お母さんだったの。だから見てる役だったのよ」という声が返ってきた。

耳をすまして

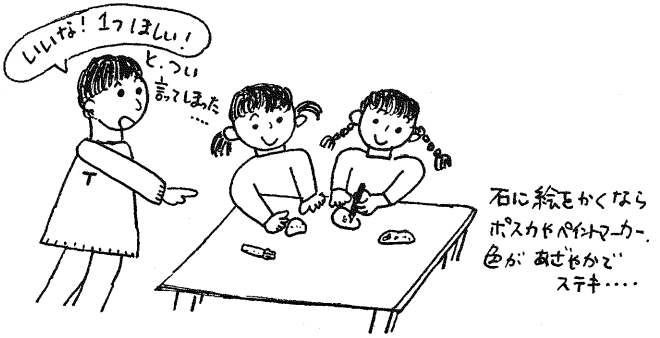
走らないのには訳があった。お母さん役をやっていたからなのだ。そう分かったとたん、全ての行動の意味が見えてくる。さっきまでとは違う風に子どもたちが見えてくる。初めから分かればよかったのだけれど……。

こんな風に、子どもたちのつもりや訳が分からずにとんちんかんなことをして反省する毎日である。

小さな石を集めていたなぎさちゃんとゆみちゃんの一言も思い出に残っている。

二人は、その石にポスカできれいな模様や絵を描いて、ついこの間死んでしまったモルちゃんのお墓の飾りを作っていた。それがあんまり素敵だったので、思わず「先生にも一つ描いて欲しいなあ」とつぶやくと、二人は一瞬沈黙してしまった。それから、大きな目でジロリと私の方を見て言った。「だめだよ、だって先生、死んでないじゃん！」

そうか、そうでしたね、もともとお墓を作っていたんだものね、と深くうなずく私でした。

聞いて納得！　その連続。そのために耳をすます。

絵と文　宮里暁美（目黒区立ふどう幼稚園）